

香取遺産

Vol.33

「津宮遺跡群の発掘調査から」 香取の海と低地遺跡



▲平成16年度に実施した津宮遺跡群発掘調査の空中写真

利根川は、近世の初頭に徳川幕府によって東遷が行われるまでは、東京湾に流れ込んでいました。東遷以前のこの一帯は、霞ヶ浦や印旛沼まで続く広大な内海であったといわれています。当時、この内海全体を表す名称はなかったようで、特に下総国香取郡に接していた一部を、「香取の海」と呼んでいたようです。

中世になると、文献から当時の様子がある程度わかります。南北朝時代の応安7年（1374）頃に作られた「海夫注文」には下総国の津（港）として24箇所地名が記されています。

その中に「つのみやの津」があり、現在の津宮付近にあったと推定されています。

津宮地区には、自然堤防に立地する津宮遺跡群と津宮古墳群があります。自然堤防は、利根川東遷以前の氾濫によってできた微高地で、香取駅周辺の東西に延びる幅300mほどの範囲です。標高は

最大で約5mになります。

津宮遺跡群の発掘調査では、縄文時代から中近世までの遺構や遺物が見つかっており、遺跡群の範囲が、自然堤防の標高約2mのところまで広がっていることもわかりました。

市内には津宮遺跡群以外にも、低地に遺跡や古墳が多くあります。

佐原地区の仁井宿東遺跡も低地に立地する縄文時代から中世の遺跡です。発掘調査では、標高約3・2mの面から古墳と住居跡などが見つかっています。

また、多古町の栗山川遺跡群では、縄文海進が最大に達したと考えられている時期の水際の跡が、標高約2・3mのところから見つかっています。

「香取の海」というと、この地域の低地全体に海が広がっていたイメージを抱きがちですが、そうではないことが低地遺跡の発掘調査からわかります。